「漱石と広島」の会 会報
第24号

2026年（令和8年）3月1日発行
「漱石と広島」の会

漱石に触発された東アジアの文学者

姜尚中氏（東京大名誉教授）が広島で講演

夏目漱石に関する著作などで知られる東京大学名誉教授・姜尚中氏による講演「漱石は東アジアの共通文化財～魯迅（中国）・李光洙（韓国）とのつながり」が11月1日、広島市中区袋町の市まちづくり市民交流プラザで開かれた。本会が発足10年を記念して広島市立中央図書館と共催した。満席の180人が耳を傾けた。

姜氏は、漱石の作品を読んで影響を受けた中韓の2作家が、自国の近代文学を先導したことを紹介し、3人の文学者が西欧「文明」の圧力をどう受け止めたかを話した。

第5回「夏目漱石のつどい―講演と朗読」の主企画で、講演に先立って広島国泰寺高校放送部による『夢十夜』2編の朗読もあった。

会員36人、一般133人、関係者10人が参加した。定員を超えた70人はお断りせざるを得なかった。

（石田信夫＝世話人）

講演要旨
4面まで

西洋の「文明」に東アジアの3人の文学者がどう対したかを話す姜名誉教授

翻訳漢語の世界を共有

◆講演は、ロンドンでの漱石の驚きから始まった。もくもくと煙を吐く蒸気機関車は文明の象徴。日本も開化に必死だ。しかし「文明」という列車は、われわれをどこに連れていくのかわからない、と不安を抱く。そこから西洋の「文明」に圧迫される東アジアの文学者との関わりに入っていく。

漱石とひと回り違う中国の魯迅は、漱石の大ファンです。それから韓国の李光洙。あまり知られていませんが、韓国で言文一致体による最初の近代小説『無情』（1917）を書きました。やはり漱石の大ファンで、私淑していました。

この3人の共通項のひとつが留学です。漱石はロンドン。李光洙と魯迅は日本で、魯迅は漱石の前の借家に押しかけて住んだ。

魯迅は、中国では近代文学の祖として、毛沢東や孫文と並び知られています。日本への留学は1902年なので、漱石がロンドンから帰る年でした。

この時代の日本人は漢詩、漢文が読めました。単に外国語と日本語だけではなく、もう一つ漢語の世界を知っていた。つまり教養が三脚なわけです。今われわれは、英語と日本語の二脚ですけれど…。

漢語を知っているから、東アジアで最初に西洋の横文字を訳して、和製の漢語を作った。韓国や中国はそれを輸入したわけです。例えばサイエンスは科学。ライトは権利。デモクラシーは民主主義。

民主主義という言葉は、それまでの中国や韓国では知られなかった。日本は、中国語を読み下し文にしつつ漢語の語彙を豊かにしていく長い蓄積があったので、アジアの中で横文字を縦に直すことに一番熟達していました。これが翻訳語です。

留学すれば、母語と違う言語と出会う。漱石は生の英語と出会った。李光洙や魯迅は日本語や和製漢語と出会った。「科学」「民主主義」などの翻訳語の世界です。

現在でも岩波文庫やみすず書房の翻訳本を読めば世界中のすべてがわかると言われています。留学しなくても翻訳を読めばいいわけです。岩波文庫の中には、僕も知らないような翻訳がいっぱいある。翻訳文化は、明治日本が初めて作り出し、東アジアの2人の作家もこれに触れたのです。

もう一つ3人の共通点は、新聞小説を書いていることです。しかも言文一致体で。

次ページへ続く

魯迅（1881～1936、中国）　1902年、日本に国費留学。医師志望から作家に転じる。『故郷』は日本の教科書にも

李光洙（1892～1950、韓国）　1905年日本に留学。帰国後に再留学。『無情』など。民族改良主義を唱える